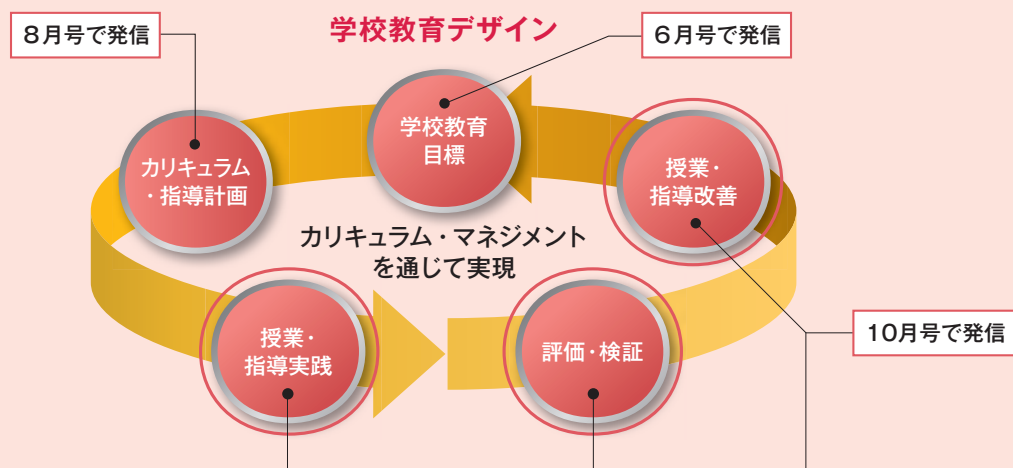


「学校教育デザイン」を描く④ 2校の事例に見る 実践のポイント

本誌では、6～10月号の3号にわたって、次の自校を創る「学校教育デザイン」を描くために必要な各視点を、具体的な実践例とともに見てきた。それと並行する形で、編集部が密着取材をしてきた2つの学校がある。千葉県立幕張総合高校と岡山県立林野高校だ。いずれも次代を見据え、「学校教育デザイン」を描く取り組みを推進している学校である。今号では、複数回にわたり取材を重ねた2校の実践を一挙に公開し、「学校教育デザイン」を描く上での実践のポイントを見ていく。

2017年 特集の年間テーマ

2020年度・22年度に向けて、次の自校を創るために必要な視点を押さえた「学校教育デザイン」を描く



「学校教育デザイン」を描く2校の実践事例

事例 1 千葉県立幕張総合高校

[P.4～9]

◎生徒も教師も人数が多い大規模校であるため、教育活動や指導が学年単位で行われることが多く、進学実績も学年の色が出やすかった。
 ◎2019年度における進学重視型の総合学科への移行、移行翌年度に実施される「大学入学共通テスト」への対応準備として、17年度の学校の重点目標の1つに「目指す将来像の検討」が掲げられた。

◎「生徒に育みたい資質・能力」について、生徒の実態や指導内容を思い返しなが、参加者全員がリレー形式で述べ、育成を目指す資質・能力の共通理解・認識を図った。
 ◎3年間の指導ストーリーを描くため、各学年の各時期における重点指導方針とそれに沿った教育活動を、学年ごとのグループで話し合った。
 ◎1学年の進路・学習指導に関する各教育活動について、時期・目的・内容などが適切かどうか、ペアで検討した。

◎生徒に育みたい資質・能力「幕総スキル（仮称）」と、それらを2018年度入学生に育むための「1学年 教育活動計画(案)」を策定し、それらを教科を超えて共有できた。また、話し合いを通して、参加した教師に前向きな姿勢が見られた。
 ◎今回の取り組みを全校に広め、各教科の具体的な授業改革や指導改善につなげること、さらに、すべての教育活動を含めた学校教育デザインを描くことが今後の課題。

取り組みの背景

取り組みの主な流れ

成果と今後の展望

事例 2 岡山県立林野高校

[P.10～15]

◎中期教育目標を設定してから4年を迎え、「次の5年間のあり方」を考えるべき時だと、多くの教師が感じていた。
 ◎生徒の進路の多様化や学力の多層化が進み、「学力向上」という教育目標だけでは、指導への意識を学校全体で統一することが難しく、すべての教育活動の軸となる「生徒に育みたい資質・能力」を明確にする必要性が高まっていた。

◎教職員間で自校の強みや弱み、「育てたい生徒像」を何度も語り合い、それを踏まえてミドルリーダーが課題を整理。そこで抽出された言葉を用いて、校長が重点目標を作成。
 ◎ミドルリーダーが「生徒に育みたい資質・能力」につながるキーワードを出し合い、それを基に校長が素案を作成し、さらに教職員全員で検討した。
 ◎教科別のグループに分かれて、1学年の教育課程表に「生徒に育みたい資質・能力」を落とし込んだ。

◎「育てたい生徒像」を基に「生徒に育みたい資質・能力」を整理し、それらを踏まえた各教科・科目の教育課程の検討へと進んだ。また、「生徒に育みたい資質・能力」を自教科に落とし込んで語り合ったことで、その理解が一層深まり、他教科の教師との対話が増えるなど、教科を超えた結びつきが強まった。
 ◎教師の語り合い・検討のプロセスを記録し、それを継承することでさらに協働性を高めることが、今後の課題。

実践を振り返って見えたポイント

[P.16～19]

千葉県立幕張総合高校



「育みたい資質・能力」を外部に発信することで、これからの教育を共有する

教頭 酒井一成



教師に求められる資質・能力を明確にして、それを高める仕組みが必要

真田信弘

岡山県立林野高校



同僚性や各教師の主体性を大切にし、環境変化を的確に捉えて、課題に一つひとつ取り組む

校長 三浦隆志



対話を通してお互いの考えを深め合っていくことで、よりよい方向性を見いだす

安東幸信